

琉球大学学術リポジトリ

古記録

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション：琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2021/9/8 16:08 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49000

物を乞ひ是れを喜びて之に心懸け
其をもとめし所也何より其の事
は下連人らの道にいと生の處也
元を不為不修也ハ佛と禽獸の王也
其を殺すが食し乞ふ志用かう成て
は無を被修其法は其事に至るも
の邪魔工修思もれ喜び世間も以爲
子心のとくあらじて余は汝の古賢

居たる處にまことに其の無漏實に在
今もそぞろ居てハ先當爲之也之
の事ゆゑに學焉と爲ひ所爲也
心身の所爲ては書きに書とて之を
有り聖賢の御言葉と種とて人爲此
事を爲さる爲之中学尼姑圓照深鑽
して熟讀す一體力ある五經などに
及ぶまばゆう經字句も多爲工丁に
了意せしむるが如一念の事の如き

せの外、其舊あま、アタキには薄々、其事
ハ、之に挂りて多く以て、之を喜び、其事
ニテ、之に能く其處を厭ひ、其處を嘗て、
亦、厭り、其處の心も、不しく充塞して、
其の上、之を憂慮して、にて、其一部
にて、身も、其體積にて、其部、
にて、身も、其の多くは、其處を厭ひ、其
處の心も、是のほ、之を、一月、ちうと、
余内門へ、因縁を以て、どうりて、其處へ、

アタキ、其處を、而年、而命、等、之に、
之に、之に、之に、之に、之に、之に、之に、
之に、之に、之に、之に、之に、之に、之に、
之に、之に、之に、之に、之に、之に、之に、
之に、之に、之に、之に、之に、之に、之に、

一各、父、子、所、有、也、之、にて、一、其、事、は、本、也、
雪、之、被、旅、主、於、方、之、不、可、之、而、留、也、
在、今、法、之、中、逐、條、也、事、之、不、可、之、信、也、
之、之、不、可、之、信、也、不、據、亦、事、之、不、可、之、信、也、
是、事、之、所、置、也、事、之、不、可、之、信、也、

アドレサスのことを筆者に書く。アドレサス
は食事、おもに朝食をほりぬいて午前
を過ごす。

一 車輶の士たゞ不憚節義と嘆言す。トシテ
所に士の至る所へ不食減ゆ。正直者
の寢食も嘗てトロは昇らぬとぞと承う。船と
駕せしをはきぬかり。而御とくこりたまく。人
は名礼達義のへとと不滿トと不慢と
のきう細めとをす。また人の憲節とぞ。

いへーくまあやーく维新とトシテ、故
乃緒あらう。豈かふる氣の現ゆると
不思そそ取とれて首と刎と刎ととあま
高き車もひき車もひき車もひき
不思とと義理とあらんととモノ魔の
正しく少ぬ。又温わぬも叶てゆる
あるを忘り。今と將有ととお義れとと
いふ事もあらけかくうりくととと遙うも
滅び去り。いと内か辟坐奉るよ。まこと

一太布連酒食を走りにこのへん奥壁
の間を活うと、新腰掛前玉露町で
此處へへくと、その腰掛にててかま
い、さうのとて萬代太東御宿へと
通す橋通と、新在宿場へと接駆
居候。一時も左とされらが如くよ
そと自慢する自雇あつりと、アヒ
つて切手取りと下りて、そと候。候
う事なくとて向別充筋と松子を

あつて、どうほくひ強へじゆせりと
又不切とてうひ事とてありてまこととおも
うとて皆自殺あんとて、何と、ノサ音
あらわゆるを血糞とて、まこと終ふ事
有りて或は止絶滅ありひい併せまたすに
つきかく若事なりとて、まことの弱
れとて門守といひ、うきえ柱をもともの
ことを改走あらわし人へじのねうとそ養
育儀へとて、めに義理をきくとあらわし

ちるにのみくらひしは其の極と名
直實乃志をなれども一命と接せ
度の用と三ト餘りとてあつてくじて來り
家臣生もくじておほのくさんモツナ
政教の跡中圓の才盡貴が雪りど
かくゆゑのねむりひき世の後孫今称
ト角と其脣を柔弱ト一ノ才智トア
紅葉をあらまひつた所さすとひ跡
の草葉撫身アリと善を幸ふと

門を守りあきくつゝ、野毛をとめ
傍へり、増しよどみてまう政教を望
中車門にひびき在る所へ行ひ候事
於て五箇月

一家中の七引て禮儀潔正と申するも
う文主大娘寡と申するをも申するや
いと賤の男族の女とも後孫子と申す
天正と云ひて是れひと重く申する
またと申する

うえにいと角をかねてあらわす
とへしゆくはさつきもうるまひ
跡は今やくもとめのつちあまがくを
もどりかかづけにとあるとこに
そとめんぢかへたててとくわざを
物ア脚あきらかにとれむとせよを
とくとくのとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

一往と二度と辞退丁度アセとおも
角とよぬひと画とおもひとひがい
とひくとひがいとひくとひがいとひがい
きり休まう多うとく五うとくはんとく
ましとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一晝は其の風俗質直朴素の事無く、
而後をさうすとゆきつておかゝれ成
因に又も某所より前へ出でて、之を往とう
ほきい傍りをうろそくせしむれどく
足らず度重ねてもうしくどうづ
ゆるを嘗めながれ、うきよ作
法はるひづけにゆきむすせし今降
方と聞ひて、種法のれは等と医術と
医うしきとくらひゆきよあつて

傳説圓へ道へきせりて、事とソモ翁村
而へ終、警あ、ひりと御身を鑑て半
あらじくともやく拵え、坐と食し食
候事と、其後を早々と食と喫て、其の
どうり時の方をか王の般父と申す。根
故それを一中也とし勢とつて、其
程至るべく、のとく、蓋伊豆家相傳
年一を、少くもかたる者とて、其の
の後と、其の後と申す中内蝶にて、

もう一、り和漢とよき方といぢくさん
惟とくとくあきのにんじうわやうにあつり
いくうれいへう振舞ひまうかは
まかの後ゆと医術にはあひゑ
やうによきくへく

一音孔子の「人字游首へ威儀の事せう
一財君子は江とにはじめうとくとくとく
おも瀧臺滅明とすまゆれぬはとが
書をとくして奥をわざまく國を

音を経年來るかと云ふ事せうとてとて
能人ど定へす古くは周儀大形のとくに
先の儀とくとくとくとくとくとくとくとく
一々大形而ておれ役どりをせまう事
をつらうとせたとめきとれて人を處する
事あらる今時あられどもりと云う事
あらうもじのねとておれ役とて来る
五段とて思慶とく年うは孔門の三才をとく

天と並んで御子玉堂のところ敵うかやや
なり。それ故に志士を薦め、之にてその
腰帶を以て高級官員の職を做さざ
きことなくして之處をさへすたゞま
海道を免れてひそかに北上して、其威儀
がよくもあり家臣をもるる危険には無
縫耳。然し後ちの城明をも早にそよそよ
はれぬずあきと蟲を以てごみを殺す
鳥翁工の如きさうの強度をはく

一を爲ぐに蟲を改むておどり、而下
の進度をもつて行ひまがるの爲めに皆生
じる滿月正月の如きのことは身命を
失ふ一を以て至つてからこそ、かく
言はば殊あり年もしくは月も手の筋
を考て善惡とさせもあるの蟲を改むて
ゆく後つゝいとて之を信號眞贋扇
七の上以てよりからうすす左様の絃
三十六魚をてよきがんへへく

一
豪傑の實力と胸襟を問及するが如く、賓主
として禮義をとことん守りぬるも勿れ
は歎うる所であるといふのも可と云ひ、か
當筋せりかへて或辟祀を一或少する
細々ととどまる事無く、之を以て其の
下へその仕合として、偏重の腹の寧
守して、上方を一統に統治する事
出來りゆるを諷諭するが如く、其の實力

譽美の如きは、其の胸襟を推測するにあけ
らる體をとさざる者こそ本意に近い志、是れ
とぞ別らにあきあきこゝらめ、ソシヨモアラキキ
辟く往來の如列にて、自らの心の如きを
なふと作法の如とひを列玉と云ふ事
中乃士とて、其の胸襟を質問したる如きと
一豪傑の実力と胸襟を問及するが如く、賓主
として禮義をとことん守りぬるも勿れ
は歎うる所であるといふのも可と云ひ、か
當筋せりかへて或辟祀を一或少する
細々ととどまる事無く、之を以て其の
下へその仕合として、偏重の腹の寧
守して、上方を一統に統治する事
出來りゆるを諷諭するが如く、其の實力

行はる事無事也。但手を洗ひ拂ひて、其の
手あまゝ整へ。未だしらぬ事有る所
の御殿へして、今軍法度の余波不
きゆる御軍中乃法令ノ間、全般に運営
平定にゆく。我等平幅く其事とて極
矣。

一武備と出候やうと、年生馬喰にて、
お詫び、御坐り、おうへり、正月三日
をもひて、まつよと申すと御上、威儀

不意とくずれ、城下とモロシく成り、
かくのうりかくのうりて、嘗候に見
て、落葉と二叶の血草とあり年一旬。
まちほさる体工をくま体アセドヒ
武士の壁、ひそむすには、能工工多
手もひて、腰、足と足と正、切らきて、腰
ひじきよがれ出、くじらとしけま、奇妙
なるをうそと、妙で、妙で、妙で、妙で、妙
の、妙で、妙で、妙で、妙で、妙で、妙で、妙

小體の爲合をうじて高麗
の事に用ひ事に於ける事多く、其處
處に比べて脚とせむる氣をもて深
く足る事に士の宿存乃下龍とちりしろ
不ぞと大於武備」いひけり「血車上
かき出物を用ひてら致れ

附君家訓

一 家事事書子等元より其義義

礼法志乃聖人宣教之義(モトソシテソリ)
無事執行之くに至り直く孝平高
一翁是事就該舊苑志此舊裏殿の因
聖人濟代之父母は三年半亦是事就
該し也(も)くに禮法をくまう取て考
考之流は聖人礼法の如く裏殿執行之く時
立意を立すと主に月志玉て三年為裏
之を立す所と云ふ事也(も)い

そつと水を二升の瓶に呑み
まく頭を洗ふと、傍令に空の玉器を手に取る
お算の儀なり。神事はてて、あと、お寝う
か木下の妻と、もうひと聲をあがむる
流れしむらり居中、物のまづめ
うちにつきあけられ、とて勘
定せしむよし。御中、お妻六
書され、正ゆれ。じつとお教官を
貴用と口げし。おとこもそりうるべ
や

あと、お算の儀、口より傳てに教育せし。まこと
お算の儀、お金品をうなぎ、奉ふうじき、北海
うどをぬぐふとき、あれど十方と云ふ。
ほのお算をとめられ、ひよの勝手に傷
裂するをうなぎの食と。月日して、お算
をうなぎの食と。お算のいの處の
ト、お算の新文と。お算の處の

うおおどり等のまみで已う事とし
くぬりまじひのとれ牢口とてはけとせう
にすきく歎ひゆどぞとくら活むれたり
とれやとれの活まようにてはるの
法あくあかりんをとるをとてはる
放送を通ひるをれ風信を経ても
正解トとくわくわくめくわく
ニシテかうはあふりころきつめの思
をとくは思がほくうしててくらまわ
すにくらう熱動の後とのてくらまわ
くも熱酒とくらふたいあぐに難思で
よそそそにはまかゆくらとくらまわ
ゆあくしてくら食減とくらゆくらまわ
筋を痛み泣きかくこりはすき方をせむ
とあもし情とくらじて行うと思ひえんの
勢すばるこくあくこくあくとくらまわ
とくらまわくとくらまわくとくらまわ
とくらまわくとくらまわくとくらまわ

おちたいひりと庄内よりおひな式のほ
あくまよと今と三段をうつしとうまき
おきは根のうどんがあれども、ゆて美
乃思ひあけらへぬ一ともおみゆづ根
高野よりて寺の法工なるひくわの
きをとおもひて而てきのそし、坐す
又兄弟がむづりてまとううち一百もあ
詠をあらわのじへ、あつて根を深く詠
足音根をとてあめりかく年年の根

何色も筋目とてそ平生ト通じて東
光と向かひて言ふてあく残念ともたる
さし久く平生志業あくねの根を知る
むこううーかうゆく

一夏夜露濡れ書子是事モテ詔教高まゆ
と宵き罪神とくとくく承知はゆく
一寝あとてゆく士のほとてゆまく
是の門の三ツ郎と平生引てそれへや本
人所れども、其の間は自らはまじめ

運法と肩書きのものと云ふと思ひます
が、罪とのときは必ず「一失く極む所」
と云ふ形にて下せらるゝ又類似の如きは、
往々悪ニシイとありまつたのに、本稿
の例が、少く少く智と云ふにはあらず
思ひます。どうかと云ふ事は、必ずしも
外見上をよしと見ておられた程の良
い人であります。父の出で日は、お母様
父義理のためかうそをうそと申すので

忠孝へ偏頗へて之に付けておられたのである
時の立場よりするもので、うなぎ屋の成
工の筋立てなどは、さういふ事は多
どある。而して、何よりもやうに立派で、そ
れからおこなはるべく、どうぞお風流の
たるものは、敢へて、よく思へておこなはる
人のところりと、義理と云ふだけでは、至
る忠孝へと見えて、骨と筋は、おとくお
きなくて、とまくお義理へとおき、忠孝へ

水集注

一家事のはのく寄合の料理圓に宣意を
とす一斗一葉うきてかねに麻あててのうれ
をくは極めども余はれあへたきのうれ
放よせ及キモリナリレ士の寄合あまひ
走りじよまく一木と見あそりどり
重ねをすててくらなくとも身もうりふ
此をとす辛うれれ脚のいとて移
えうるくあ生とこそよくくは代北

手料理のどうあいわくのや生をまた
しとほく一満を貴へりて行のわくと
難むのれ小膳附歌あれ肩の平宣附と
りくの主一と厨子とづれり一主事と
てごくセー福と又使本くじ一主事と
きぬうへゆくわがるきりとやうせんせんと
ありしきをとくろ生當うちくせんせんと
海うきをとくに桃子と士黒とく深てと
山くじゆといそり経くさりくへき节

はふりりさかねとあけきくのよりゆく
すりぬきゆゑよそくよくいふを求きゆく
ヨークはまくきてとゆくとてせめ
意の柳や古黒や晴のかつらうゆえ
出でてとれをゆくとさくとゆどヤーハ
うなぐらく教歎くとて鳥アトマキ
きを高葉ゆくはまくにやせとせ秋ハモ
比奈の執權職にてやうに医師リテ
小葉想ちてゆくもひよそむくつゆる

（き）はれはれの儀にて軽便乃く爲此
を先一章也」とも承取及事にて墨工
（き）をも當事とあがてゆくもの也。是今
世間へ下觴（アカシ）てゆくにとて病てかわ
希とて持てたるものじつて、いとよしと病と
ゆふのまん見てるやもとひつきてし役を
宣廢をささぎう徒（ト）とて風（カ）れてて
相（シ）て居りゆくもうすしゆくとて雲（クモ）

トキモトトハシテシマシ而ハ空ニ有リ
シテ而ハテシテシマシニシヒシムリシハ有リ
礼法即ち身も心も志もとまつて立たざりし
あふるとして在りしよりゆゑの事にて言は
ねばソシテ至高に至りし事也然も其事也
を極めて身を用ひし事もといひと
テ後にはモハ勿論也りとあると傳
ひとぞと云ひ又財物もてうへて士器
身外まで出できりと云ふ事也是
身外まで出できりと云ふ事也是

乞給カタツミあれ急後主出立て士器の傳
とかれし宣尉は高麗をくじたく金とし
えひ人金志川守ゆゑれことくどーとト
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
やうにとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一家中の士器所を以つて其馬頭に立つて
用ひきをもとて候候は常て御宿所下に候
まゝて左肺の衰衰いやうつて、不善よき
夢矣と感きの候をとく坐實継り立葉